

*** 東京天文台時代のブラッシャー天体写真儀について**

アーカイブ室新聞 250号に昭和24年3月1日発行の東京天文台の「見学の栞」について書いた。その中のブラッシャー天体写真儀の項には次のように書かれている。

「本台敷地の東南部に佇んでいる瀟洒なドームにはブラッシャー天体写真儀があり、諸種の天体、特に小惑星と彗星の写真に依る測定及捜索が行われ、時には対物プリズムを用いて天体の分光撮影がなされます。この望遠鏡は米国で特に天体写真用に設計された赤道儀望遠鏡で口径20cm、焦点距離127cmで、別に口径15cm、焦点距離182cmの案内望遠鏡と優秀な時計仕掛けを持っており、数々の業績を遺して来た歴史的なものであります。写真撮影は時計仕掛けと案内望遠鏡に依って天体を追いかけて感光度の高い乾板を用いて数十分、或いは数時間に亘る露出を必要とし、こうして撮影された項惑星及び彗星はその位置を測定し、計算に依ってその軌道が求められます」。東京天文台で活躍していた頃の姿が写真1である。

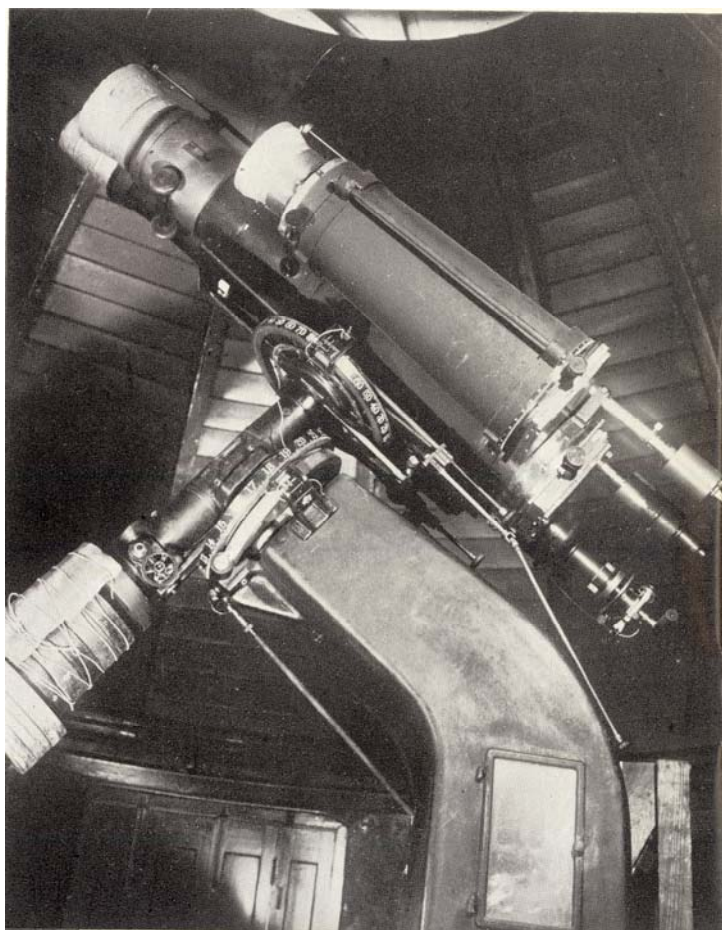


写真1 活躍していた頃のブラッシャー天体写真儀

なお、他の資料によると、ブラッシャー天体写真儀は明治 39 年（1906 年）購入、口径 203cm、ブラッシャー製ヘースティング型とあり、また別の資料によると口径 20cm、F6.3 のペッパル型と口径 15cm、F4.5 テッサー型の 2 個で、これと口径 12.5cm の案内望遠鏡をならべて赤道儀に載せてある。そしてこの望遠鏡でいくつかの小惑星が発見され、それらには「みたか」、「とね」、「あたみ」、「にっこう」、「はこね」、「たま」、「すみだ」などの名前が付けられているとある。見学の葉に記された瀟洒なドームが写真 2 である。このドームはすでに撤去されていて三鷹の天文台キャンパスにはない。

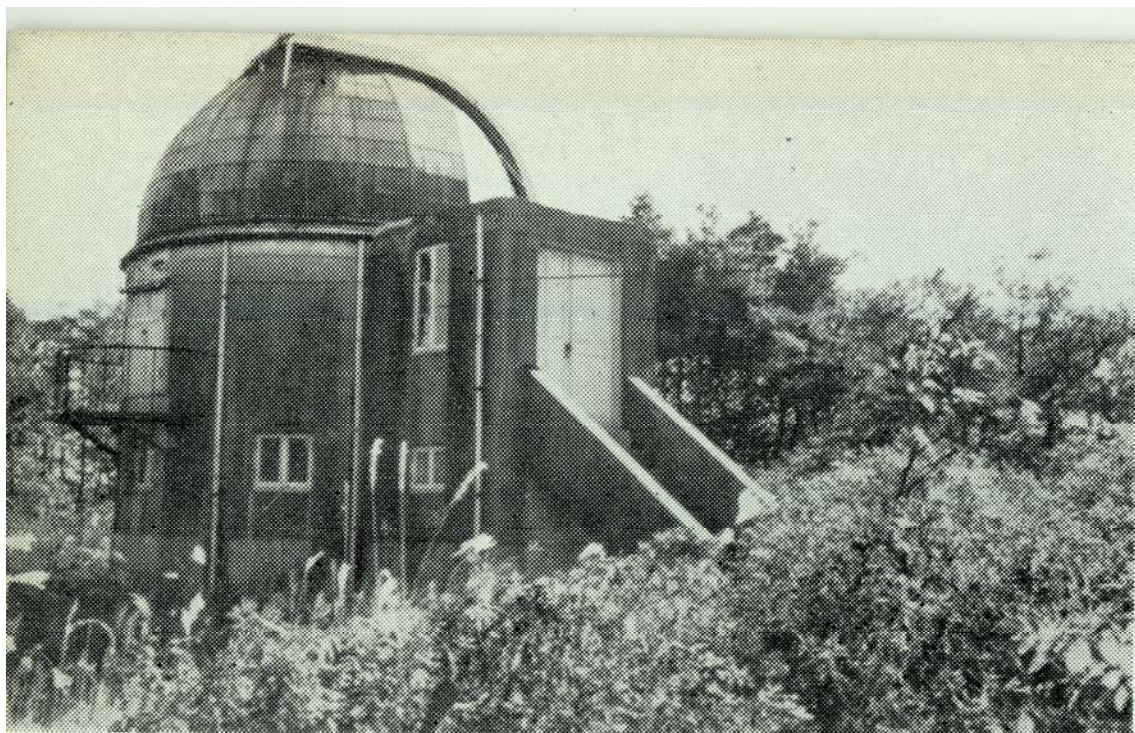


写真 2 在りし日の瀟洒なブラッシャー天体写真儀ドーム

写真 2 のブラッシャー天体写真儀ドームは、国立天文台正門を上ったところにあるロータリーの南北の通りの南端にあった。筆者の記憶ではすでに荒れ果て、朽ちなんとしていた記憶がある。このドームは筆者が「すばる望遠鏡」建設のためハワイにいた頃に取り壊されたようである。このドームの中にあつたブラッシャー天体写真儀の行方を追及してみると、ドームが取り壊されてしばらくは、65cm 屈折赤道儀望遠鏡ドームの脇におかれていたが、国立科学博物館に引き取られていったと聞かされた。

そこで、国立科学博物館に現状を問い合わせたところ、国立科学博物館のつくばの資料館に保管されているという情報ももらった。そこで国立科学博物館で、保管状態で展示されていないのであれば、このたび、国立天文台「天文機器資料館」と名を変えた「自動光電子午環棟」に展示のために貸出して欲しいと依頼したところ、その方向で話が進む事になり、この由緒ある歴史的な望遠鏡の里帰りを心待ちにしているのである。

国立天文台天文機器資料館には、堂平観測所にあつたソ連製の人工衛星追跡用 AFU カメラ、太陽単色写真儀（モノクロ）などのように、一度は国立天文台（東京天文台）から姿

を消していた由緒ある望遠鏡が里帰りを果たして展示されている。他にも日本の時刻を決めていたPZT（写真天頂筒）、フランス製のプランの子午儀、ドイツ製のツアイスの自動光電子午環などの望遠鏡、マイクロフォタメーター、座標測定器、写真濃度測定器などの歴史的な測定器類も収蔵されている。写真3が国立科学博物館収蔵のブラッシャー天体写真儀の現状である。



写真3 国立科学博物館所蔵のブラッシャー天体写真儀

このブラッシャー天体写真儀はアメリカのブラッシャー製であるが、このブラッシャーの末裔は「コントラベス」といい、すばる望遠鏡の主鏡を研磨した会社である。すばるの主鏡はこのコントラベスで4年間かけて平均面精度12nmというすばらしい鏡に製作されたのである。